

# タイの華人同姓団体

## — 家族会・族親会に注目して —

吉原和男（アジア地域研究所特任研究員）

弘末：続いてのご報告は吉原和男先生にお願いしております。プログラムのタイトルから少し異なりまして、「タイの華人同姓団体— 家族会・族親会に注目して —」という題目でご報告いただきたいと思います。どうぞよろしくお願ひいたします。

吉原：今回の公開シンポジウムのテーマの「海域世界の社会統合— 外来系住民と現地社会」を考えるということをあまり考慮しないまま昨年夏にこちらの研究所のプロジェクトでいただいた調査費で9月に海外調査に行っていました。その折に入手した資料を一部使ってお話をするようになります。

本日の私より先にご発表なさった先生方のお話をうかがっていて思うのですが、私がタイの華人についての研究発表をここでするのですから、多少無理やりにでもこのシンポジウムのテーマに近づける努力をしなければいけません。例えばタイではピブーン（1897-1964、ピブーンソンクラム）という、第二次大戦の前とその後に関首相になった陸軍幹部出身の政治家がいます。ご存知の方もいらっしゃると思いますが、タイでは軍人、警察官僚などがたくさん政界で有力者として活躍するわけです。民族としてのタイ人は父系出自主義ではないので、父親がタイ人の子供は、母親が中国系であっても華人とはみなされず、タイ語ではルアット・ファソム（Luat Phasom）と呼ばれてタイ人とみなされるのです。ピブーン首相はこうしたルアット・ファソムに区分される人物であり、第二次大戦期に独裁的地位にあった頃以降、華僑に対する抑圧的政策を進めたのです。若いころの体験によって華僑嫌いになったと言われます（村嶋、1996年）。母系まで含めると中国系の血統を引く有力者が少なからずいるというのは大切です。

それから、20世紀の前半からはずっと離れた18世紀後期にアユタヤ朝に続いてトンブリー王朝というのがあります。これは存続期間が20年足らずとごく短かったのですが、この王朝を開いたタークシン王（1767-1782）は、父親が中国大陸の潮州地方の出身です。澄海県というところから出て来た鄭姓の庶民だったのですが、アユタヤ朝の末期には賭博場経営に成功して徴税請負人となりました。その人の奥さんが現地人であり、その夫婦に生まれたタークシンという息子は言わば混血であり、アユタヤ朝の大臣の養子になった後で軍功によって出世します。こういう外来者の子孫がタイでは王朝を開いているわけです。そして、その後継の今のチャクリー王朝の中にも中国系の女性が側室に入っているということがありますので王朝は血統的には複雑であったようですが、かなり古くから中国人が働くためにやって来てタイの現地社会に定住化していったのです。これはずいぶん時間的なスパンが長いのですけれども、何かこの辺りでシンポジウムのテーマとリンクするのではないのでしょうか。

そして、今回取り上げますタークシンと同郷の潮州系の華人というのは、タイでは非常に人口が多いです。中国系の人口の6割ぐらいが潮州出身、あるいはその出身者を先祖に持つ人だと言われていいますから、この潮州系を取り上げることにして、材料を少し集めてみました。もちろん中国系は潮州人以外にも存在し、例えば福建人はかなり早くからタイの南部、マレーシアに近いところに来て定住していました。そして地方の支配者になっているということがあります。これはもう既に先行研究文献があります。

華僑や華人というのはどういうふうに使分けるとというのが専門家の間でも議論があるぐらいかなり面倒なのですが、そこはあまりこだわっていると先に進みませんので、**資料1**を参照してください。

## 資料1 華僑と華人

「華人」とは中国からの移住者を祖先とする現地国籍の住民あるいは中国・台湾などから移民して帰化によって現地国籍を取得した住民を指す用語とする。国籍において中国（中華人民共和国）や台湾（中華民国）籍の住民は「華僑」として区別される。祖先が清朝時代に移住した人々も少なくない。漢字で表記すると弁別に留意が必要であるが、Overseas Chinese, Ethnic Chinese という英語表現を簡略に表現してチャイニーズという日本語表記も可能であろうか。

中国からタイへの移住者の入国・帰国者数の累計は1932年から1945年までの間では、入国者総数が約47万に対して出国者総数が約38万であり、純増数で見ると約9万人であったが、第二次世界大戦後には大きく回復する。すなわち、1946年から1955年の間に入国が約27万に対して出国が11万であった。約16万人の純増であった。しかしこれは、入国者数がほぼ半減し、出国者数もほぼ三分の一まで落ち込んだ結果である。

中国からタイへの移住者数が統計的に最大であったのは、1918年から1931までの間であった。入国者数累計約133万人に対して出国者累計は約83万人を下回り、純増数は約50万人であった。第二次世界大戦前後の時期における中国の混乱の影響が人口の二国間移動に反映していると考えられる。

一方、タイ国内に定住化した中国人の人口、すなわち「華僑」人口を見ると、1919年の約26万人から1937年の約54万人と20世紀前半には増加をたどっていた。しかし第二次大戦後は、中国からの新たな入国者数が大きく減少したためにタイ国内の華僑人口は漸減した。それでも第二次大戦後の1947年には約48万人の華僑がいた。しかし、その後に帰化人口が増えたこともあり、「華人」の人口が増えた一方で、華僑の人口は1970年には約31万人、1987年には約18万人まで減少した。

上述の人口動態が華僑・華人の団体結成にも大きく影響したと思われる。つまり、中国から新たに入国した人々の社会生活を支える親睦・相互扶助団体の増加をみている。

タイ国内の同郷団体は、その前身団体も含めると、19世紀後期から20世紀の前半までにほとんどが成立している。今回の報告の主たる対象である潮州人に関して見ておくと、泰国潮州会館は1896年に中国仏教寺院である大峰祖師廟を前身組織として成立し、1938年に泰国潮州会館に組織変更している。タイ国潮州会館の成立は、他の方言・同郷会館と比較してむしろ遅いくらいである。そして潮州会館の傘下にある県別の同郷会館が成立したのは、ほとんどが第二次世界大戦直後の時期である。このことは新規の入国者数の増加が反映していると考えられる。

タイ国籍に帰化した華人によって宗親総会のような大規模な同姓団体が結成されたのは、後続世代による華人文化継承と華人社会の持続的発展を願いつつ、華人社会のネットワーク緻密化と統合性を高める社会装置として機能させるためであったと言えるであろう。

帰化によって国籍を所得して華人になっていくということがありますので、「華僑」というのは数が非常に少なくなってきているわけです。今日扱いますのは、華人が任意参加でつくる団体というのがいろいろあるわけですが、資料1にあるような同郷団体とか同姓団体、ギルド（同業団体）に近いもの、それから学校の同窓会、趣味・スポーツ、こういったものは主な目的として親睦であるとか相互扶助活動ということを掲げて結成されるわけです。

この種の団体は、やはり移民が外国へやって来たときに現地社会に適応していく1つの制度的な試みであろうと考えることができるわけです。中国系のそういう団体のうち、同姓団体というのが今回報告させていただく対象になります。私は今までかなり組織構造が大きいものに関心を持って見て来たのですが、どうもそういうものばかりを見ていても

あまり面白みがないといえますか、結論めいたものはだいたい想定できるということがあったのです。ここ数年こういう大きな宗親団体、後で述べます宗親会や宗親総会というふうなものに比べるとかなり故郷の親族組織、あるいは専門用語では宗族と言われているものに近い組織が興味深いです。この宗族とのつながりが非常に強い組織がタイに存在していること、中華人民共和国が成立してずいぶん時間がたつのに、まだ宗族の意識が残っているということに大変興味を持ちました。

つまり、中国では社会主義化したにも拘わらず封建的な土地所有に基盤を置いた社会制度、すなわち宗族が所有していた土地がかなりの割合を占めているわけです。特に華南では多い場合には地域の耕作地の6割ぐらいがこういう親族組織である宗族が共有地として持っている土地であったのです。新しい国づくりのためにこうした共有地は解体されて行ったのですが、祖先祭祀を行うことを大義名分にしてつくられた宗族組織を支える世界観は、そう簡単に人々の頭の中からは消えていかなかったのです。

現代の中国人には宗族意識と呼ばれるものは残っていないと見做されるかもしれませんが、改革開放経済体制になって以降は華僑・華人が自分たちあるいは祖父母世代の出身地に訪ねて来る事が頻繁に見られます。

地元政府はその機会を活かして経済開発に協力してもらうことを目的にして多少迎合するような雰囲気や昔の宗族組織に近い繋がりを黙認する動きもあります。

それはともかくとして、第二次大戦直後に移民した人たち、特にタイの場合ですと1940年代の終わりから50年代にかけて多くの人々が来るわけですが、そういう人たちは社会主義中国を嫌がって外国へ出たということがあります。もちろん出稼ぎですから経済的な目的もあるわけですが、そういう人たちのメンタリティに注目しますと、宗族というものは儒教とか土地制度とかというものが基盤にないと、なかなか発達はしていきません。海外でもそういう宗族意識が非常に大きな作用をして人々が宗族に類似する組織をつくっていくことになったと考えられます。

ところで、同郷団体は同姓団体に先立ってできています(図1)。1912年成立の福建会館から始まって、1912年成立の江浙会館、1926年成立の客属総会、1936年の広肇会館が戦前にできています。潮州会館というのは潮州人の団体としては組織規模が一番大きなもので、1938年にはできています。戦後になって海南会館、台湾会館、そして雲南会館ができます。

これらを全体的な団体組織として見ますと成立年は図1で示した順序になるのですが、

名称	成立年	前身団体の名称	成立年	備考
泰国福建会館	1912年	福建公所	1871年	
泰国江浙会館	1923年			江蘇省・浙江省出身者
泰国客属総会	1926年	暹羅客属会所	1910年	広東省梅県
泰京広肇会館	1936年	広肇別墅	1877年	広東省珠江デルタ地域
泰国潮州会館	1938年	大峯祖師廟	1896年	広東省旧潮州府10県
泰国海南会館	1945年	瓊州公所	1875年	
泰国台湾会館	1947年	台湾公会	1935年	
泰国雲南会館	1956年			

図1 同郷団体

実はそれに先立つ前身組織というのがずっと前にあるわけです。その成立は19世紀後半から20世紀の前半までいろいろあります。これらは中国大陸における出身地とそこで使われる方言の違いによって結成されています。日常使用言語の違いによってこういうアソシエーション、つまり民間の任意加入団体がつくられているわけです。

このうち、今回は潮州系の団体を詳しく見ていきます。まず県単位の同郷会が戦後にでき始めます（図2）。1946年成立の潮陽同郷会から1978年成立の南澳同郷会までの10団体で、総て潮州会館の傘下にあります。こうした県単位の同郷会のさらに下部に旧時代の宗族や宗族連合に繋がる同姓団体があります。潮州系以外の方言別集団でもやはり傘下団体ができているわけですが、それについては触れません。

同姓団体というのは、私は2つのタイプがあるのではないかと思います。宗親会と宗親総会です（資料2）。こういうふうな同郷団体にせよ同姓団体にせよ、任意加入であってお互いに助け合うこと、あるいは仕事や生活に役立つ情報の収集を目的にして結成されたのです。

つまり、タイという外国では、中国語だけでは生活やビジネスに関わる情報というのはつかみきれないので、タイの公務員であるとか、あるいは現地生まれ・育ちで長いこと、タイ国民として暮らして来た中国系の人を顧問に依頼して成立しているのです。タイ国内で社会的な地位のある人を招聘して相談しながら、あるいは将来の見通しを立てながら生きていこうと考えたと思います。ですから、中国で出国がほぼ禁止されてタイへの流入人口が激減すると、中国系の華僑の人口がどんどん減っていき、一方では帰化して華人になっていく人が多くなってくると、中国系の人たちがどういうふうな対応をしたかは、大変興味あることではないかと思います。

ご存じの方が多いと思うのですが、同姓団体のことを考える際には、中国人の家族やその延長上にある親族組織の構成原理を確認しておく必要があります。つまり、父系出自主義ということがあります。父親の血統を引く人間は、男も女も自分の父の姓を受け継いでいく。もちろん、養子になるという例外的な血縁継承の方法もあるのですが（父系の直近上位世代に継承者がいない場合に下位世代の男が養子となる）、いずれであっても基本的には父系血縁があれば同姓であることが当然であると考えられるわけです。

女性も婚姻してから夫の姓が変わるということは日本のようには見られません。自分の氏名の表記というのは夫の姓を先に持って来て、その次に自分の実家の父親の姓をつけて

名称	成立年
潮安同郷会	1927年
潮陽同郷会	1946年
掲揚会館	1947年
普寧同郷会	1948年
澄海同郷会	1947年
大埔会館	1942年（客家）
豊順会館	1963年
饒平同郷会	1965年
恵来同郷会	1947年
南澳同郷会	1978年に準備委員会

図2 潮州の県単位の同郷団体

### 資料2 同姓団体の類型

#### <宗親会>

日常生活用語としての中国語方言を共有する人々によって結成されることが多い。概して会員本人の出身地や先祖（直近世代の移住者）の出身地が同じである。

#### <宗親総会>

上記の宗親会よりも組織構造の規模が大きい団体であり、中国語方言が異なる同姓の宗親会の有志が協同して結成されていることが多い。あるいは、バンコクにある宗親総会の地方組織としての宗親会もある。

ファーストネームを下に置く表記をしているのです。つまり今回のテーマに関係することで言いますと、父系出自主義というのは父親が中国人でありさえすれば、母親の民族性が何であっても生まれた子どもはみな中国人だと見なされるわけです。このためこれを統計的に正確に捉えるのは、なかなか難しいところもあるのですが、血統的に中国系と見なせる人口が増えるわけです。**資料1**で述べた華僑の人口も、血統的には全て100%父母両系の中国人というわけではないわけです。

バンコク大都市圏には1990年代までに約90の同姓団体が成立しており、そのうち60団体が宗親総会でした。これら宗親総会が結成される件数はある時期に集中しています。簡単に言いますと1940年代と50年代には1つの団体しかつくられていませんが、1960年代になりますと10団体、そしてその次の70年代には12団体、80年代にも9団体、そして最近はあまり結成されなくなりましたが、90年代にも新しく結成され、あるいは既存組織の活動が活発になるというようなことがありました。この宗親総会・宗親会という団体は大宗祠とか宗祠と呼ばれる祖先祭祀のための非常に豪華な施設を建造することを理想と考えています。これは巨額の費用を調達し、かなりの年数をかけて造ります。こうした現象がなぜ特定の時期に集中するのかについて今回はあまり触れません。

こうした宗親総会・宗親会には、興味深いことに下部組織と言えるような団体として、組織規模の小さい家族会・族親会と呼ばれるものがあることが確認されました。この家族会・族親会は、解体されてしまって今はない故郷の宗族とのつながりが強く確認できる団体です。家族や宗族というのは、言わば生まれ込んで来る組織です。ところが、家族会や族親会という団体は海外で結成されたアソシエーションです。つまり、特定の姓を有する人が加入できる任意加入団体です。本人が基礎的な資格を持つ、つまり団体の掲げるファミリーネームと同じであれば入会申請をして会費を払えば会員になれるというものです。任意加入ですから、その特定中国姓の人が総てこのような同姓団体に加入しているということではもちろんありません。

タイでは中国系住民も普段はタイ語の名前を使うことが普通ですが、中国姓が、そしておおよその出身地も分かれば、中国の故郷や祖籍が同じであり、祖先が同じ宗族に属していたことはかなりの確度で確認できます。ですから、そういう人たちは非常に親しい付き合いをするということがあります。

これに対して、宗親会や宗親総会は規模が大きいだけに組織全般としては人間関係があまり濃密ではありません。家族会や族親会は、内部の人間関係においては、大きな同姓団体とは反対の性格を持っているということになります。ですから、昔からの生活習慣とか言語がお互いにほぼ分かり合えるのです。これは非常に重要なことではないかと思われま

す。陳姓の団体については**資料3**で示しておきます。同じ陳姓の人であっても、出身の県や村が違えばその出身地ごとに家族会や族親会が結成されていきます。これらは総て潮州系の団体ですから、厳密に言うと使用方言はまったく同じではありませんが、潮州語ということでくくられて、ほぼ言葉が通じるわけです。

参考までに別の方言集団の陳姓団体としては、広東系の泰京広肇陳穎川堂（1928年に陳家館として）、海南系の海南陳家社（1946年）もあります。日常生活では方言がまったく違いますと話し言葉によってだけではコミュニケーション

潮安東鳳郷族親会

泰国秋溪陳氏延華堂総会

旅泰古巷同郷会

旅泰普寧赤水郷親会

旅泰普寧横山郷陳氏宗親会

泰国榕江穎川宗親会

泰国潮陽西岐郷陳氏宗親会

澄海建陽郷聯誼会

旅泰陳氏西山逸士公総会

### 資料3 潮州系陳姓の族親会・家族会

#### 資料4 泰国秋溪陳氏延華堂總會

12世紀末に潮州府に隣接する福建省の泉州より潮安県觀塘（鶴塘）へ移住した陳増公・担公の子孫が移住した先の1つである秋溪（村）からは後世になって海外移住者多く出た。タイにおける最初の組織は1973年から1975年にかけて34人によって設立準備がされた。組織名称は初め旅泰秋溪陳氏延華堂互助社（延華堂は郷里にあった大宗祠の名称）であったが、1982年に現在の名称に改称した。1983年に会所開設。会員子弟へ奨学金を授与。役員に輩行字を共有する者が多いことは組織内に宗族的な人間関係が強いことを示している。その輩行字の根拠となる詩も伝えられている。

初代理事長は第47世。草創期の副理事長・理事長であった陳徳欽氏は1916年郷里にて出生。青年期に渡タイ。

1976-83年の理事長であった陳英木旁は1927年頃に機械・車両販売業の経営者となった。タイ国出生。潮安同郷会名誉理事。機会商同業公会発起人・理事長。

ン、意思疎通ができないわけですが、もちろん中国語で書けば分かることはあるのですが、方言が通じる大きな同郷会組織によって華人社会は縦割りになっていたわけです。そして互いに方言が違えばあまり付き合いがなかったのです。そういう状況でしたが、60年代以降に、先ほど言いましたように、方言の違いや出身地の違い、特に出身省の違いを超えてバンコクの華人の社会を横断するような団体が結成されていくわけです。それが宗親總會です。

さて、この陳氏の宗親總會の下部組織を個別にみますと、たとえば泰国秋溪陳氏延華堂總會は宗親会タイプの団体になります（資料4）。この団体については、文献資料を入手しただけで、あまり詳しい調査はできてないのですが、これは陳氏の宗親總會ができた後に設立されています。宗親会と宗親總會では、どちらが先にできたということが一般論として言えないわけであります。宗親總會が先に立ち上がって、そして組織規模が小さいものが後でできるという場合とその逆があります。宗親会のほうが先にできていて、そのあとに宗親總會ができたときにそこに統合されていってより大きな組織ができることがあります。2つの方向があるわけですが、その理由がまだはっきり分かりません。個別のケースによってその事情が違うようですが、この延華堂總會は陳氏の宗親總會ができた後にできていることが設立年で確認できます。

しかし、1つ付け加えておきたいです。団体が政府に認可されて登録されるというのが正式な成立年代なのですが、そういう登録を必ずしもしない場合もあるわけです。非公式な存在のまま組織はなく人間関係だけがあるという場合があります。そうすると、そういう存在は外部からは捉えにくいのですから、成立年を確定するのは難しい場合があります。特定の前身団体がすでにいくつかの行事を実施していて、例えば中国の旧正月ですが、このときに集まって宴会をする。それから故郷で行っていたお祭りのタイでの実施もあります。そのほかに年に数回ある宗教的な祭礼。さらに、村の宗族の開創者の祖先祭祀です。こういったときに関係者とその家族が集まってインフォーマルに会合が持たれるということがあるのです。それが組織化されているか否かの違いはあるとしても、族親会や家族会の設立年だけにこだわっては拙いのです。

潮安東鳳郷族親会もやはり陳氏の總會ができた後にできています（資料5）。旅泰古巷同郷会も總會ができた後にできています（資料6）。今は陳氏に絞って多少詳しく書いたのですが、それ以外にも資料7で示すように、潮安県出身の他姓によって結成された同姓団体もあります。ここで見られるように陳氏以外の団体も中国での互いに非常に近い地域で、それぞれがこういう家族会を、あるいは族親会という名前のものをタイ国内で結成して活動しているのです。

宗族は1949年の新中国成立後の土地改革によって解体が進みました。宗族というのは、

**資料5 潮安東鳳郷族親会**

現在は潮州市東鳳区の一部となっている東鳳村出身の陳姓による団体。1971年から故郷で遊神盛会が行われる農曆正月25日に懇親会を実施。

同会が1986年に調査したところ男女合計約400人の同郷族親がタイ国内にいたことが判明。婚礼や葬儀の折の互助活動を行う。

永遠名誉理事長である陳銳拳氏は1912年郷里で出生。1924年来タイ。缶詰食品製造業を興して成功。各種慈善団体への多額の寄付。中華総商会、潮州会館執行委員、潮安同郷会、陳氏宗親総会の理事などを歴任。

**資料6 旅泰古巷同郷会**

1980年代現在では潮州市古巷区となっている古巷には2万人以上の陳姓が住む。海外移住先では東南アジアが多く、中でもタイが最多である。1980年代後期には少なくとも2000人が居住すると言われている。

同郷・同姓の20数名の陳姓が結成にあたって決めたことは、毎年農曆正月19日に故郷での遊神盛会（祭礼）の日にレストランにて懇親会を開くことであった。数年後に参加者数は400人以上となった。

1979年には寄付金を集めて会所を購入している。1983年からは奨学金、翌年からは助学金の支給を行っている。

理事長の陳文初氏は1923年生まれ。青年期に郷里より渡タイ。缶詰食品や冷凍食品の企業を経営。金融業にも進出。潮安同郷会の常務理事。

**資料7 陳氏と類似の同姓団体**

- |   |    |
|---|----|
| (1) 旅泰潮安石礪溪郷劉氏家族会   | 劉姓 |
| タイには約3000人の族人が居住。1964年成立。1973年には郷里へ探親する者があつた。タイへ村の宗族の開祖の香火を持ち帰る。祖祠を建造する意向が固まる。1983年に政府に登録。婚葬慶弔礼節。1984年に郷里を皆で訪ね祖先墓を修理。 |    |
| (2) 旅泰急水仙美郷李氏族親会  | 李姓 |
| 宋代の開村、タイへの移住者が最多。正月10日に聯歡会。1971年設立。   |    |
| (3) 旅泰上哺郷黄氏家族会  | 黄姓 |
| 3月13日の林水夫人聖誕、年末の謝神、正月聯歡を行ってきた。1980年代中ごろに家族会設立。  |    |
| (4) 旅泰潮安独樹郷莊氏家族会  | 莊姓 |
| 1980年設立   |    |
| (5) 旅泰潮安銀湖郷聯誼社  | 吳姓 |
| 1982年成立。郷の人口の99%は吳姓。タイ在住者は約600人、故郷で奨学金授与  |    |
| (6) 旅泰潮安江東都葛外郷郷親会   | 王姓 |
| 1987年成立。正月5日に聯歡、  |    |
| (7) 旅泰潮安崗湖郷黄氏家族会  | 黄姓 |
| 1981年成立。  |    |

単なる人間関係の枠だけではなくて、日本の親族組織と大きく違い、宗族の共有財産があるということです。そして、自分たちの血縁コミュニティを持続発展させるためにいろんな活動をする。祖先祭祀の行事もその1つですが、そういう継続させる努力があったので、ずっと存続して来たわけです。ですから、土地改革以降の政策によって組織が解体され共有財産が没収され、さらに先祖の墓も位牌を祀る宗祠も壊されて、やっと宗族の活動は停止したのです。しかし、先ほど申し上げましたように、それまで宗族に属した人々の頭の中が一変したわけではありません。祖先祭祀を大切に思う気持ちとか、父系血縁のある人間は互いに家族の延長として困った時には助け合わなければいけないという意識はまだ相当強く残ったのです。ですから、人民公社の時代になっても人民公社の下部組織の中に、かつての宗族の人間関係が反映していたということは既にアメリカ人の人類学者が研究して本も出ているぐらいです（アニタ・チャン、リチャード・マドスン、ジョナサン・アンガー、小林弘二監訳『チェン村』筑摩書房、1989年、原著1984年）。

タイではこのような団体が結成される一方、中国では改革開放が進められて経済発展するようになった。そして、中国では外国から華僑・華人の資本を呼び込むことが中国の開放政策にとって非常に重要になるわけです。ですから、香港あたりが一番典型的なのですが、香港よりは遠いタイでもやはり自分や祖先の出身地、あるいは中国の特定の地方に土地勘がある人間が資本投入して工場を新設するとか、何らかのビジネスを展開していこうという関心が高まって行ったのです。道路や水道建設、あるいは学校・病院などへの寄付である公共投資も歓迎されたのです。

呉氏と張氏の宗親総会をこれから紹介していくのですが、張氏宗親総会の前に成立した宗親会というのが実はあります。宗親総会というのは、自然に成立する組織である家族やその拡大されたものとしての親族組織すなわち宗族とはまったく違った原理によって結成されます。つまり、血縁の再構築をするということです。新たなイデオロギーをつくり出すことによって、儒教文化という宗族成立の文化的基盤がない社会において、同姓の人が自分たちが同姓であるのは血縁関係があることの証であると主張して、それを根拠にして同姓者は家族・親族のように助け合わなければならない、と考えるのです。

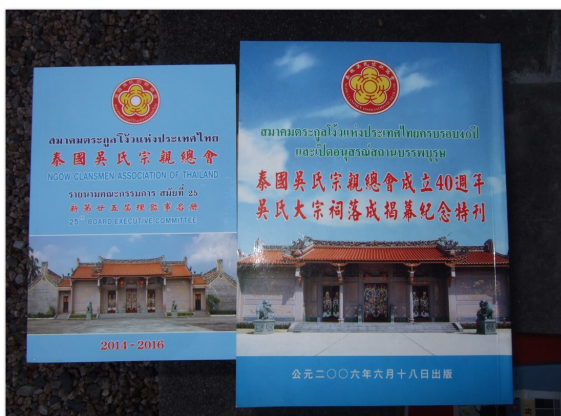


写真1 呉氏宗親総会の資料

バンコクの呉姓の呉氏宗親総会では、去年大きな行事が行われています。それを見学に行つて**写真1**の資料をいただいたのですが、このような資料を使って分析したことが今までお話ししたことです。**写真2**は大宗祠の入口の写真です。大きな国道に面して建てられています。中に入りますと、**写真3**のような中国伝統様式の建物があります。前面は普段は駐車場として貸し出されて団体の収入源になっています。屋内を見てわかるように、莫大な寄付を集めて建造



写真2 大宗祠の入口



写真3 大宗祠



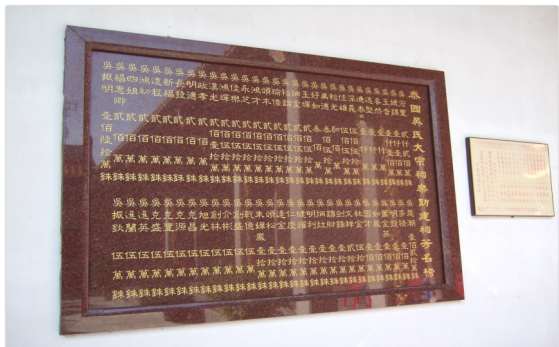


写真4 寄進者



写真5 由緒書き



写真6 先祖祭祀の祭壇



写真7 先祖の位牌

されています(写真4)。寄付金最高額である2,200万バーツというのは、すごい金額であり、タイの普通の住居なら数軒は建ちます(当時のレートは1バーツ2.8円程度)。写真5は由緒についての歴史的な記述です。

祖先祭祀の祭壇は非常に立派なもので、台湾から輸入された部材を使って大工さんにも来てもらってつくられています(写真6)。写真7は会員の人たちの祖先の位牌です。赤いカバーをかけてあるのは、まだ生きている人の位牌です。これは息子たちが親孝行のためにつくったのです。祭壇の配置位置に応じた金額を寄付します。この位牌の場合ですと、父親はまだ生きているわけです。母もまだ生きている。亡くなった時点で赤いテープをはがして名前が見えるようにするのです。

参拝している人(写真8)にインタビューしたところ、奥さんのほうも外見は明らかに中国系なのですが、自分は中国人としての意識は全然ないと言っていました。夫が長男なので一緒に来て、父親が最近亡くなったので位牌を配置する儀礼をするために来たのだと説明してくれました。見学した今回の行事は秋祭りです。儀礼執行の中心者は写真9にあるような中国清朝時代の役人スタイルの仰々しい礼服を着ています。日本で言うと和装の



写真8 参拝者



写真9 儀礼



写真10 位牌の設置



写真11 張氏宗親總會



写真12 港頭郷の張氏家族總會



写真13 寄進者の写真

礼服みたいなものでしょう。

こういう定期儀礼を毎年必ず行いますから、最近亡くなった家族がいる場合はここへ来て寄付をしてから位牌の登録をします。この人の場合、お母さんはまだ生きているわけですが高齢のため来られなかったそうです。テーブルの上で作業が終わった後、**写真10**では担当者の人が家族の代わりに位牌を高い位置に置いています。

次は、張氏宗親總會です(**写真11**)。これは街中にある建物の1階にありますが、実はこの總會自体はほとんど活発な活動をしてないし、豪壮な大宗祠ありません。バスも通る市内の主要街路に面していますが、うっかりすると見落とすようなありふれたビルの低層階を会所にしています。

ここの事務局長をしている人は「張氏の場合には家族会のほうがこの總會よりも大きいし、活動が盛んなのだ」と言っていました。そういう話を聞いたので、私は總會傘下の下部組織をリストアップしてもらって一つ一つ訪ねました。**写真12**はそのうちの一つで、港頭郷の張氏家族總會って書いてあります。ここは大宗祠を有する宗親總會のように豪壮な建物ではありませんが、組織規模が小さいはずなのに、それにしても立派な建物であることが分かりました。總會の会所よりは建設費用がかかっているようです。これを建てるために役員や会員は多額の寄付をしたのです。建物をつくる時に寄付した人が名前と写真入りで顕彰されています(**写真13**)。この場合は金額を書いていませんが、たくさんの金額を寄付した人ほど大きい写真が掲げられる団体もあります。



写真14 祭壇

ここでは祖先祭祀の祭壇や会議室が2階にあります(**写真14**)。**写真15**は故郷を訪



写真15 故郷訪問



写真16 先祖の墓

ねたときの記念写真と祖先の宗祠ですね。**写真16**は先祖の墓。それから、これは昨年度の活動の記録写真です（**写真17**）。祖先祭祀の儀礼をしたとき地元の華字紙に掲載されたのを自分たちの会所に掲示しているのです。

相互扶助に関して見ていきますと、葬儀や婚礼の機会が重要視されています。なるべく多くの参列者が得られるよう会員の皆さんにも参加してもらって、そのお礼として所属団体に寄付をするということです。盛大な葬儀は親孝行の証と考えられているのは儒教的思想が継承されていると思われます。

中国の郷里の宗族（正確には、昔の宗族が形式的に復活途上にある）が最近活発に活動していますので、**写真18**のような族譜をつくることもあります。

資料には個人の事例とかいろいろ紹介されています。そこには、第二次大戦直後に裸一貫でやってきた人たちが少なからずいます。例えば金属資源回収業の会員です。多くの方はほとんど資本投下なしで起業して、がむしゃらに働いて、やがて金属製品あるいは自動車・バイクなどの販売店を経営するようになった。そして仲間内では成功したと思われる人がたくさんいて、そういう人たちがこのような家族会や家族会を下部組織として含む宗親会の中心になるのです。あるいは、そこに呼ばれて名誉会員になってたくさん寄付をするということがあるようです。そして、親の世代とは違って、移民二世以降はこういう団体は古くさい、煩わしいと考えて入会しないことが多いそうですが、一方では自分が親から引き継いだ仕事との関連で家族会・族親会の会員を継承することもあります。

例えば、泰国周氏宗親總會をつくった中心者は、マレーシアから来た周姓の人から「マレーシアに宗親会というのがたくさんある、タイでも組織したらどうなのか」というような話を参考にして、その後香港に行ったときに香港で既にできていた団体の人から、どのように準備すれば同姓団体が立ち上がるのかという話を聞いて、タイでも始めたこと、文字資料として確認できました。

それから、泰国周氏南益公族親会はやはり總會ができた後につくられています。以下に書いておいた家族



写真17 華字紙掲載の写真

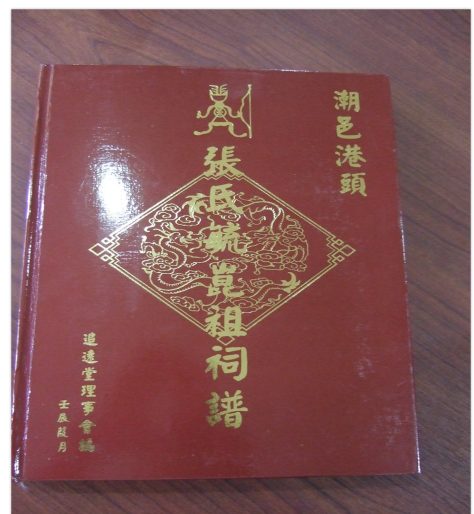


写真18 張氏族譜

会・族親会のほとんどが宗親總會のできた後に結成されていますが、その理由はまだ推測段階です。

それから、マレーシアのことにあまり触れることはできなかったのですが、現在のタイの宗親会總會は、ほかの複数の姓の人たちと共に連合団体をつくっていて、その連合団体の代表団がマレーシアのペナンに訪ねて行くことがありました。そして、その宗親会とか、今ここに書きましたペナンに古くから存続してきた宗族の大きな組織、正確には福建省南部にある宗族の言わば海外分会ですが、こういう人たちと交流をしている。このような現象は、華人がネットワークを拡大していくという、1つのトレンドの中に位置づけられるのではないかと思います。

福建省南部から渡航して来た特定宗族のメンバーが移住先で海外分会を成立させていたということが実はあったのです。これはかなり古くにできています。ここに設立年も書いておきましたが、19世紀の前半です。これはタイの現在の宗親会の成立過程を研究するために、研究しなければいけないと思っています。マレーシアのペナンでは、18世紀の後期にこういう大宗祠ができていますので、明らかにタイの同姓団体のモデルになった、あるいはそれらの先行組織であろうと推測されます。

最後に参考文献について触れます。英語で書かれたもの、中国語で書かれたものいろいろありますが、例えば1935年に潮州の宗族組織を中国人が研究して原稿は書いていたのだけれど、60年後に刊行された本があります（陳礼頌 著『一九四九前潮州宗族村落社区的研究』1995年刊、上海古籍出版社）。これを見ますとこの地域ではやはり宗族組織が非常に強大であって、そこから華僑が出た場合、華僑の移住先での人間関係がやはり宗族の人間関係にかなり影響を受けているということが書かれています。以上です。

## 質疑応答

**フロアA**：マレーシアとタイとのいわば国をまたぐ宗族の結びつきがあったようですが、中国政府は国際政治あるいは国際外交の中でこういう任意団体を取り込んでいくということは考えられませんか。

**吉原**：すでに現在、先ほどもちょっと触れましたが、現代中国で改革開放の時代、つまり1990年代ぐらいから、正確に言うと79年に鄧小平の宣言がありますから、80年代、90年代とだんだん強まってきています。とにかく外国から資本を導入するといっても、それは日本人、アメリカ人も行って会社をつくったりするわけですが、一番彼らが期待しているのは、もと華僑であって現在資本主義の先進国に住んでいる人たちです。そういう人たちが自分の故郷なのだとということで、土地勘があるわけですから、来るのです。だから、これははっきり言わなくても、それはもうそういう人たちに期待が集まっているし、出掛けて行くほうも中国に行って人件費節約ができるし、言葉が通じて話もしやすいわけですから行く。ですから、いろんな任意加入団体が訪問団といいますか、探親団を組織して、故郷の親族を訪ねていくためのツアーを組むわけです。単に懐かしさ故の観光旅行として行くだけではなくて、かなりの部分ビジネスの下調べで行く、あるいは仕事も兼ねて行くということもあるのではないかと思います。

香港の場合ですと、返還される前にこういう同郷組織、同姓組織を利用して香港の情報を集める、あるいは大陸の情報を集めるということを相互にやっていたのは確認できています。タイの場合もすでに財閥企業がこういうところに関与しています。中国姓が謝姓の大きな財閥オーナーがいますが、ここもやはり中国で事業を展開するときにバンコクにある謝氏宗親総会の名誉会長になって多大の寄付をして情報を収集したと団体の会所の事務長から聞きました。そういうことは私自身も他でも確認できております。国際政治について具体的な事例は良く知りません。

**フロアB**：中国の政府がどういうふうに華僑といいますか、Overseas Chinese, Ethnic Chinese だと思うんですが、インドの前に2002年に海外インド人問題省というのをつくっている。それをつくったときに明らかに中国政府の動きに影響を受けてインドも何とかしなきゃというのでやってたんですが、中国政府の中でそういう海外移住者を担当するような省庁とか部局があったら教えていただきたいと思います。

**吉原**：僑務弁公室、こういう部門が政府の中であって、そこが地方にも出先を持っていてしっかり華僑、華人の入国管理および訪問時の世話と管理をやっています。周恩来がバンドン会議で二重国籍、海外に出ている華僑の二重国籍を解消しなきゃいけないということ言って現地化をするように促進をしていっているということがありましたので、そういう影響があるのだと思います。

近世から近現代にいたる海域世界の社会統合